全農養豚セミナー 座談会を実施

NEWS

ハイコープ種豚の成績向上を目指して

2020年2月、福岡県福岡市で、ハイコープ種豚を飼養されている農場の方々と、JA、経済連、全農グループの養豚関係者による座談会が開催された。2019年秋の養豚セミナーの開催中止を受け、発表を予定していた各農場における事例紹介と、生産者の皆さまによる意見交換を行った。

より良い管理ノウハウを多角的に模索

全農養豚セミナーには、例年多数の関係者が集まり、「くみあい養豚生産管理システムWebPICS」の集計概況の報告をはじめ、ハイコープ種豚に関する講演を聴いたり生産者の皆さまが発表する事例を共有してきた。

2019年度は折からの豚熱(CSF)の影響を考慮して農場の方々や関係者が一堂に会するセミナー方式の報告会を中止し、成績優良な4農場による取り組み事例の紹介と意見交換を主とした座談会を実施。全農畜産生産部 推進・商品開発課の大畑による司会進行のもと、各現場における特色ある飼養管理の内容や今後の経営課題などが発表され、関係者も交えての質疑応答が行われた。これに続いて「ハイコープ種豚の能力を最大限に引き出す管理とは?」の議題で4農場の方々による意見交換を実施。全農飼料畜産中央研究所 養豚研究室室長の舘野がファシリテーターを務め、「母豚の生涯成績向上に向けた育成期の飼養管理」「離乳から分娩にかけての給餌量調整」「離乳率を高めるための授乳管理の重要性」「畜舎の暑熱対策と夏バテ防止策」「ハイコープ種豚の今後の改良への期待」の各テーマを巡って、各農場ならではの見解や意見が活発に交わされた。

農場の方々同士が有用な飼養技術などを共有するとともに、養豚関係者が会してコミュニケーションを深めるための貴重な機会ともなった。

事例紹介

「ハイコープ種豚の能力を最大限に引き出す管理とは?」

養豚歴40年以上で、現在は妻、長男、私の3人で母豚80頭規模の家族経営を行っています。かつては疾病の多さに悩まされていましたが、10年あまり前に全農クリニックのサポートを受けるようになったのと、その後のスリーセブン方式への転換が成績アップの起点となりました。また、課題抽出と改善策立案のため、JA関係者を交えての検討会も、毎月実施するようになった事が、経営安定化に大きく役立っています。現在は自家採取AIも行い、種付けコストの削減も実現しています。

佐賀県
松本養豚場
松本 俊治さん

広島県唯一のSPF農場で、年間約2万7,000頭を出荷しています。繁殖・肥育・出荷販売においても独自の数値指標を設定しており、例えば繁殖成績は「生涯離乳子豚総数/母豚」が多いほど良いと考え、離乳頭数は全産歴において11頭/腹を維持。産歴別に母豚の目標体重を設定しての給餌量調整も行っています。当農場が考える「正しい物差し」に沿った飼養管理に努めるとともに、格付け率を高めると同時に枝肉重量を可能な限り大きくするための取り組みにも力を入れています。

広島県
株式会社広島ポーク
小島 将洋さん

親会社が運営していた養豚農場が2016年の熊本地震で被災し、18年に全面改修した新規の繁殖農場です。馴致舎、交配舎、妊娠舎、分娩舎、子豚舎の各畜舎での合理的な飼養管理を行っています。最初に導入された母豚は4産目を迎え、分娩率も離乳頭数も良好に推移。給餌法などについては試行錯誤をしている側面がありますが、データの蓄積にともない、更なる経営の安定化が図れるのではないかと考えています。

熊本県
株式会社KCRファーム
農場長 西村 優さん

当農場が出荷する子豚は、JAごとう食肉センター(長崎県五島市)全出荷頭数の約53%(2018年度)を担っています。2016年より深部注入AIを導入し、発情周期の正確な把握、母豚の体型ごとの給与マニュアル整備、分娩介助手順のフローチャート化、分割授乳の実施など総合的な取り組みを進めた結果、産子数と離乳率がアップ。PICSの成績も飛躍的に伸長しました。頭数が増加した反面、出荷期が早まったために枝肉重量がやや落ちている傾向があり、今後はその課題を解消する事が目標です。

長崎県
JA全農ながさき 五島種豚供給センター
所長 山下 秀喜さん

生産現場の貴重な声に触れられました

ハイコープ種豚の飼養管理に携わる方の多くが、他の農場の取り組み内容に大きな関心を抱かれています。今回の「全農養豚セミナー」は残念ながら規模を縮小しての実施となりましたが、生産現場におけるさまざまな工夫を水平展開する事は重要であると考え、成績優良な4農場の皆さまをお招きしての座談会を開催しました。

各飼養ステージにおける管理に加え、夏場の暑熱対策などについても各農場ならではの取り組みが紹介され、出席された生産者の方々同士の質疑応答も活発に行われました。

産歴別に目標体重を設定して母体の体重管理を緻密に行われている広島ポーク様、深部注入AIなどの実施で産子数をアップさせ、分割授乳や里子などで離乳率も向上させているJA全農ながさき五島種豚供給センター、家族でさまざまな改善に取り組み、長年安定経営を持続している松本養豚場様、新規設立以降飼養データを積み上げ、試行錯誤されながらも事業を安定化させているKCRファーム様と、いずれの事例も他の生産者の方々にとって大きなヒントとなる内容でした。JA全農は引き続き、ハイコープ種豚を飼養する全国の生産者の皆さまを全力でサポートしてまいります。

JA全農飼料畜産中央研究所
養豚研究室
室長 舘野 浩一